

靴の歴史散歩 ⑧3

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

内田商店の二代目、内田^{ふとみ}二十三（1890－1961）も、初代直二以上に業界に貢献した人物であった。したがって『靴産業百年史』の「靴業界の向上につくした人びと」にも載っているのだから、それを参考に話を進めてゆきたい。

二十三の名前の由来について、明治23年生まれだからというところが、いかにも分かり易くて印象に残る。

内田二十三の名前が業界に登場するのは昭和4年からで、前回の初代直二の項で「関東大震災後は、経営を養子の二十三に任せ、第一線からは退いたが……」とあるのに符号する。

昭和4年に創立20周年を迎えた東京靴同業組合が、その記念総会で、組長 大塚菊雄、副組長 内田二十三、植木円吉を誕生させた。

大塚組長は期待通りの改革を行ない、同業組合中興の祖とよばれるほど多くの事跡を遺したが、昭和6年、健康の不安を理由に組長を辞任、後事は二十三に託された。二十三は固辞したが、結局組長に推挙され第12期の組長に就任した。ちょうどこの年、満州事変がおこり、日本の空に黒い影を落していた。

『靴産業百年史』の編者佐藤栄孝は、二十三が組長として行なった事業で、後世に残るものとして①「靴の記念日」の制定 ②春秋2回の商品見本市 ③日本手工製靴競技会 ④百貨店の不当廉売対策 などがあると挙げている。さらに私の座右の書『靴の発達と東京靴同業組合史』（昭和8年刊）も、内田二十三が組長時代に出版したもの

であることを附記しておきたい。

昭和24年設立の、社団法人 東靴協会の設立代表も内田二十三である。まさに「靴業界の向上につくした人」そのものであった。

戦中戦後の混乱期に、私心を忘れ靴業界の命運を守ったリーダーの一人であったことは間違いがない。

『靴産業百年史』も「内田はこうして12年間の要職にしばられて心身をすり減らしてしまったが、この難局に処して靴産業の維持と、その調整に精魂を傾けた公平無私的態度は、業界2万人の敬愛の的であった。」と結んでいる。

昭和26年、長年の功績により緑綬褒章を授与されたが、これは戦後靴業界での授章第1号であった。

余生は茶道と絵画で平安な日々を送っていたが、昭和36年（1961）12月25日、病を得て死去した。享年72歳。



内田商店二代目 内田二十三